

アンパイア（第1話）

県東地区大会準決勝。今から、県大会出場をかけた重要な試合が行われる。A中は県東地区大会を2連覇。今年は3連覇がかかっていた。監督は名将と呼ばれる先生。押見は教員に成り立てで、この試合の1塁塁審を担当した。

試合前、名将が私の所に来て、野球とは全く関係の無い『効果的な生徒の取り調べ方』という話をした。『まずは、優しくそこに座って、と言う。そして生徒が油断して椅子に座る直前に、椅子を蹴飛ばし、生徒がひるんだ所で、襟首をつかみ、やったなと睨む。このときに、俺は全てを知っているんだという目が必要だ。』というご指導を受けた。そんな冗談か本気か分からない話をしていると、試合前のノックの時間になり、雑談は終わった。

準決勝が始まった。予想通り、緊張感のある凄い試合になった。勝てば県大会出場、負ければ引退。両校1歩もひかず1対1のまま延長8回に突入した。

8回裏、A中にピンチがおとずれる。2アウト1・2塁。1塁審判の押見の緊張も最高潮に達していた。ここで、相手の中学校は3塁前にセーフティーバントをした。押見は、このバントがバントエンドラン（ランナーも盗塁のようにスタートをきっていること）であることが見えた。『もし、1塁がセーフになれば、3塁を回った2塁ランナーはホームでセーフになる可能性が高い。ということは1塁がセーフになれば、A中は負ける。』

A中のサードは猛ダッシュをして、ボールをつかみ、1塁に矢のような送球をした。一方、バントをした選手も、もの凄いスピードで一塁に加速して迫ってきた。『これは、とんでもないクロスプレーになる。もしかすると、同時のタイミングかもしれない。』私は、耳を少し一塁側に向けた。水嶋新司さんの漫画『野球狂の詩』の中で、目がほとんど見えなくなり引退する審判が、最後の1球をキャッチャーがとるミットの音の位置で判断したことを思い出した。

『バン、バシッ』ほんの僅かだが、ベースを踏む音とボールがファーストミットに収まる音がずれ、16分の1音符のような音がした。

『セーフ』私は大きく両手を広げた。その時、視線の先に名将の姿が見えた。名将は腕組みをしたまま表情を変えず、私と同じように1塁の様子を見ていた。

ファーストはすぐホームにボールを投げた。しかし、ランナーはタッチをかくぐりホームイン。A中の三連覇は消えた。

試合後、他の中学校の先生方は私に『ナイスジャッチ』とは言ってくれなかった。恐らく、名将がどう感じているか皆不安だったのだろう。

仁王立ちで名将が私の前に現れた。私はまな板の上の鯉だった。もし私がミスジャッチをしていれば、3年生の努力を消し去ったことになる。名将は私を見つめて言った。『セーフだな。ナイスジャッチ。』私は『ハイ』と答えた。